

## TERIMA KASIH (ありがとう) う) インドネシアの皆様

酒井 哲夫

アジア養蜂研究協会第2回大会が、インドネシア共和国林業者ならびにガジャマダ大学の友好的且つ積極的なご協力を得て、無事盛会裡に終了できたことに対しインドネシアの関係各位に、先ず以て、深甚の謝意を表する次第である。

アジア養蜂研究協会(以下AAAと略称)は、アピモンディア国際養蜂会議ワルジャワ大会(1987)でトウヨウミツバチに関するシンポジウムが開かれた際、インドのベルマ博士が、アジア地域のミツバチ科学研究者が協力する組織の必要性を提案されたことに端を発し、タイのウォンシリ博士、玉川大学の松香光夫教授らと共にAAA設立準備委員会が発足したのは1989年であった。

AAA事務局が玉川大学ミツバチ科学研究所(本年から研究施設と名称変更)に決まり、活動を開始したのは、1990年12月からである。

漸く機が熟し、AAAの正式な設立総会が、1992年2月、タイのチュラロンコーン大学で開催された「アジアのミツバチおよびハチ寄生ダニに関する国際会議」の期間中の2月11日に開かれた。アジア各国の研究者はもとより、アジアに関心の深い欧米の研究者たちも加わり活発な討議が行われ、規約、役員、今後の活動方針などが決まった。そして最後に第2回大会は1994年にインドネシアで開く予定で準備を進めることが全会一致で決議された。

### 林業大臣からの公文書

1992年7月16日付で、インドネシア共和国林業大臣から、AAA第2回大会については、2月タイで行われたAAA総会の要望を受け、林業省が責任をもって開催するという有難い内容の公文書を授受した。この公文書を受け

た時に、アピモンディア発展途上国養蜂分科会委員会を長く務められた親日家のスカルティコ氏が林業省の幹部であられることを思い出した。2年毎のアピモンディア国際養蜂会議で日本から出席された方々には馴染み深い方で、われわれ玉川大学関係者も大変お世話になっていた。

翌1993年の7月には、インドネシアから林業省の新進気鋭の養蜂担当官アグス、チャンドラ両氏を玉川大学へ第2回大会の打合わせのため派遣して下さった。両氏も大変日本に、そして玉川大学に親近感を持ち、松香教授、吉田助教授たちと肝胆相照らし、大会運営の具体的方針を十分把握して帰国された。

続いて1993年9月、アピモンディア第33回国際養蜂会議北京大会には、インドネシアからは前述のスカルティコ氏、本大会で組織委員長を務めていただいたトハディ氏をはじめ、アグス、チャンドラ両氏を含め大勢の方々が参加された。9月24日には、スカルティコ氏の座長で行われた「発展途上国の養蜂」分科会のあと開催したAAAのミーティングでは、インドネシアでの第2回大会に関して熱心な討議が行われた。ファーストサーキュラーを全員に配布し、トハディ氏から大会の準備状況や会場となるジョクジャカルタについても綿密な説明があり、質問や要望事項を受けて、帰国後更に検討を加えセカンドサーキュラーで詳細に発表する旨を約束していただいた。

### 最終打合わせにインドネシアへ

インドネシアからの強い要望もあって、1994年4月30日から5月5日まで、私はAAA事務局長松香教授と共に、準備状況の現地視察を兼ね最終的な打合わせを行うためにインドネシアを訪ねた。短期間に能率よく仕事をと、アグス氏はこの期間ずっとわれわれ2人につきっきりで、早朝から夜遅くまで精力的にスケジュールをこなしてもらった。

到着した翌日5月1日には、7時半にホテルを出発して国立養蜂センターに向った。雨季が明けたばかりの田舎道は、舗装道路ながら穴ばこだらけで車の天井に頭をぶつけながらのドラ

イブで大変だったが、センターに到着してその広大な養蜂植物園の中に新しく建てられた研究・研修施設の充実しているのに驚いた。さすがに、養蜂振興に力を入れている国だけあると、その心意気に感じ入った。セイヨウミツバチは、分園の方へ移動されたところで見られなかったが、90群のトウヨウミツバチが可動式巣枠を使った小型の巣箱で飼育されており壮観だった。このセンターの責任者は前述のチャンドラ氏で、玉川大学を訪問した時、吉田助教授試作の縦型巣箱（ニホンミツバチ用）に目をつけ、帰国後早速作ってその群は大変好調のようであれしかった。われわれ2人のために、林業省の養蜂関係者が日曜日にも拘らず各地からセンターに集っていただき恐縮した。

5月2日には、林業省の会議室でスカルティコ氏を座長に、第2回大会最終打ち合わせのミーティングを20名余の組織委員会のメンバーを集めて開いて下さり、万事行き届いた準備状況を聞くことができ、安堵した次第である。

5月3日には、早朝5時半にアグス氏の迎えを受けて空港へ。ガルダ航空でジョクジャカルタへ着いたのが7時半、インドネシア第一の国立大学がジャマダ大学へ直行した。こんなに朝早く大丈夫なのかと訝がる私たちに、ジョクジャカルタ出身のアグス氏は「ジョクジャでは大学も朝7時始業です」とのこと、これまた大いに驚いた。

大学では林学部のスマルディ教授と日本へ留学して佐賀大学で修士、鹿児島大学で博士の学位を取得されたウイウイ助教授（女性）が応待して下さった。会場予定の建物を次々案内していただき、「開会式そして口述発表会場としてはこの建物、展示会場、ポスター発表会場はこの場所、パーティー会場には2つの候補がありますがどうでしょうか」などと既に十分検討されており、われわれはただ最終決定をするだけになっていた。

5月4日には、セイヨウミツバチ4,500群を飼っているヘルマン氏を訪ねることになり、アグス氏と9時にホテルを出発した。私の頭の中には、1975年頃、インドネシアにセイヨウミ

ツバチの導入が試みられたが、失敗に終わったという古い記憶が残っていて、4,500群を擁する養蜂家がいると聞いた時、いささか驚きと同時に疑いの気持ちがよぎった。しかし、実際に、それぞれ100群位の蜂場を5か所見てまわり、決して強群ばかりではなかったが、2段継ぎ箱の群も見られ、カボックの流蜜に合わせての建勢期であることもわかり、インドネシアにセイヨウミツバチが導入され、飼育に成功している事実を確認することができた。

この蜂場まわりの間に、プランバナンの遺跡も見学することができ、エジプトのピラミッドを思わせる石造の寺院群に目を見張った。ジャワ文化のふるさとと言われるジョクジャカルタは、AAA第2回大会開催地としてまことにふさわしい所であると感じて帰国したのだった。

#### おわりに

期待通りの大会が盛大に行われた経緯については前項に譲りたい。

ここで私は、この会議の陰の力となって下さった玉川大学卒業の大先輩マリオノ・ムルトデイハルジョー氏に心からの感謝を捧げる次第である。マリオノ氏は、ジャワ島の旧王族の方で昭和11年から玉川学園旧制中学校に学ばれ、お子様たち4人もすべて玉川学園の卒業生という大親日家で、大戦後もずっと日本とインドネシアの親善のために努力を続けておられる。

松香教授と私が5月にインドネシア入りした時以来、入国時から林業省への案内など大変お世話になったが、この大会に玉川大学関係者が多く参加することを報せると、是非大会にも出席しようと開会式前日からジョクジャカルタに来て下さり、側面からの応援をしていただいたことを特に記してお礼を申し上げたい。

(〒194 町田市玉川学園6-1-1

\* 玉川大学ミツバチ科学研究施設内 AAA 事務局)